

林文會堂義端年譜稿(上)

元禄末年まで

はじめに

林九兵衛義端は、元禄五年に了意の遺作『狗張子』を刊行し、自らも『玉櫛笥』『玉櫛子』の兩作を著わした怪異小説作家として著名である。また、周知のように、都の錦は、『元禄大平記』(元禄十五年刊)で、「学者と指さす書物や」の一人に「伊藤素安の高弟林九兵衛」を挙げている。

この義端について、寛政四年刊『諸家人物誌』は「名へ義端字ハ九成稱九兵衛平安ノ書肆仁齋ノ門ニ學ブ扁シテ文會堂ト號ス嘗テ東涯コノ堂ノ記ヲ作ルニ往々九成カ為人ヲ賞スノ著述ノ扶桑名賢詩文集 詩林良材 文林良材」と記述するが、明和六年刊『熙朝儒林姓名録』には、彼は「伊藤仁齋固菴の二子に學ぶ」とされ、「著わす所文林良材、文法授幼抄、扶桑名賢文集及び詩集等有り」と記載される。義端は仁齋と固菴の門下であるという説は、森潤三郎氏の「古書閑談」にも踏襲されている。一方、水谷不倒氏は、『新撰列伝体小説史』で「彼は、堅くるしい仁齋門である

よりも、融通の利く素安の弟子であった方が相応しくないだらうか」と、義端が素安の高弟であるとした都の錦の記述を支持されている。

林義端が伊藤仁齋門下の書肆である事は、柳牧也氏が指摘されているように、明白な事実なので、彼が素安、固菴に學んだとする説が誤りである事は、いうまでもないが、戦前の水谷不倒氏、森潤三郎氏の簡単な記述からでは、義端の古義堂での活動と出版活動とを含んだトータルな活動が、まだ充分にはうかがえないと言わなければならない。戦後に入っては、昭和三十五年、柳牧也氏が、「書肆・林義端考」を発表されて、義端や伊藤東涯・梅字兄弟と、徳山藩第三代藩主毛利元次との交渉が明らかにされた。最近では、渡辺憲司氏が、毛利元次の文化圏という観点から、義端についても言及されている。本稿の目的は、以上のような研究成果をふまえ、彼の出版書と古義堂での活動を調査して、今まで断片的にとりあげられる事の多かった林義端についての年譜を報告する事にある。

中 嶋 隆

なお、年譜を作成するにあたり、引用資料中の漢文は、書き下し文に改めた。また資料に登場する人物のうち、伝の明らかなものには、簡単な註を附した。(先)は、東涯の『先游伝』に、記事が載る事を示している。刊行書の所蔵略記は、以下のとおりである。

- 〈京〉京都大学附属図書館
- 〈鈴〉京都大学文学部鈴木文庫
- 〈慶〉慶應義塾大学図書館
- 〈東〉東京大学総合図書館
- 〈狩〉東北大学図書館狩野文庫
- 〈加〉都立中央図書館加賀文庫
- 〈早〉早稲田大学図書館
- 〈富〉京都大学医学部富士川文庫
- 〈宮〉宮内庁書陵部
- 〈国〉国会図書館
- 〈鴨〉東京大学鴨軒文庫
- 〈古〉天理図書館古義堂文庫
- 〈内〉国立公文書館内閣文庫

正徳元年まで

承応三甲午年

○祖父「道寿」十一月二日卒す。

義端の墓のある京都市東山区粟田口の仏光寺本廟には、他に妻「英寿」と娘二人の墓と、父母・祖父母等の墓の、計三基の義端関係の墓がある。彼の親族の歿年は、以下全て、これらの墓碑銘によっている。なお、御住職蘆井信恒氏の話では、過去帳はなく、墓も無縁であるとの事である。

寛文元年辛丑年

○祖母「妙寿」七月八日卒す。

寛文十一年辛亥年

○父「宗寿」九月一日卒す。享年四十七才。

延宝七己未年

○妹「妙慶」正月二十八日卒す。享年十三才。

貞享二乙丑年

○六月から十一月の間に、増井左平太の紹介にて古義堂に入門する。

(10) 帳) 一、林九兵衛 増井左平太／両替屋也〔東東院住〕(初見

「増井左平太」については未詳であるが、『納礼志』によれば、貞享二年正月八日に「大隅一庵」の紹介で、古義堂に入門し、「大阪辺代官牢人之由」と記載されている。

貞享五戊辰年

○五月十日、「新介」を介して、「中村治兵衛」を古義堂に紹介する。

一、中村治兵衛／築前之牢人由、林九兵衛同道にて新介方へ被出、新介同道にて被出候(初見帳)

元禄二己巳年

○十月十八日、東涯、論語講のあと、義端を訪問する。

。時々しけれ。論吾講止好礼迄漢書会延引。講後林九兵衛へ見舞申候留主不逢 其より高橋数馬、北村伊兵衛、良快、順政、稻若水へ見舞。夕飯後渡辺元安へ(注イ)蒔田之會に参候

(元禄二年己巳日録)

(注イ) 北村篤所、名可昌、通称伊兵衛、字伴平、号篤所、享保三年歿、七十二才(先)。

(注ロ) 稻生若水、宇宣義、通称正助、正徳五年歿、六十才(先)。

(注ハ) 渡辺元安、名榮、享保七年歿、五十九才(先)。

○この年までに、兩替屋より書肆に転業か。

僕姿粟凡庸にして書を嗜む癖有り。遂に業を改め書林に入る。

(扶桑名賢文集 序)

僕もと市井の賤士、何ぞ識見する所ぞ。幼より文を読むことを好み、迹を書林に託して、以て意を載籍の間に肆にすることを得たり。(同書 凡例)

元禄十一年刊『扶桑名賢文集』には、転業の動機が、このように述べられている。後述するように、最初の刊行書である『物類相感志』が元禄三年正月に出版されている事や、『元禄三年庚午日録』五月朔日の「林九兵衛之肆に観書」という記事から考えて、遅くとも元禄二年中には、義端は書肆に転業していなければならぬ。

元禄三庚午年

○正月、蘇軾著『物類相感志』を出版する。

元禄三年庚午正月吉日／東京洞院通夷川上町／林九兵衛版

行 〈東〉

○秋、蘆文水の家で、白菴⁽¹⁾禅師手書きの『唐僧詩選』を見、出版を乞う。

予嘗て抄白禅師手書之本を蔵すこと久し。庚午龜岡の日、

梧に據て披閱する時、書坊林九成、之を覽じて堅く鏤梓を

乞う。(唐僧詩選 跋)

○八月二十日、義端が同道して、深江藤七(蘆文水)等を、東涯に紹介する。

八月二十日 陰日。林九兵衛同道にて田中勝春と申人并深

江藤七初来謁(元禄三年庚午日録)

『元禄甲戌歲旦詩録』によれば、深江藤七とは蘆文水の事なので、この訪問は、『唐僧詩選』の草稿の入手と関係があると思われる。

○正月二十一日、三月十五日、五月一日、八月七日、九月十八日、十月十八日、十二月二日、東涯等が林九兵衛宅を訪問する。

正月廿一日^(注ニ)。陰雨初霽或霽。午前三浦養庵^(注ニ)へ從先生罷越

候 北村伊平^(注ホ) 高橋佐渡 中島恕元被出候 参リニ林九兵

衛并恕元へ寄ル夜半過帰宅

三月十五日。陰風。平井春益^(注シ)へ見舞其々次郎三郎^(注チ)留守 林

九兵衛 中島恕元へ参候。晚方茂七郎^(注ト)へ重藏同道ニテ参候

五月朔日 晴少時々陰。禮記集會後平八元庵等同道にて

林九兵衛之肆に観書。七書會

八月七日 晴。朝飯前講尺源藏^(注リ)。飯後 林九兵衛

竹笠やへ参候

九月十八日。孟子講(略)。講後 清治 五郎吉 寿仙と

共に林九兵衛へ罷越候其々竹かさやへも参り候

十月十八日 晴。孟子講。多羅尾快庵被出子息紀内始而同

道被致候。講後用事共にて林九兵衛 竹笠や 北伊兵衛^(注ル)留守

平井春益^(注フ)留守 高橋数馬^(注ヘ) 寶道房良快 吉田次郎三郎

（罷越かへる。）

十二月二日 朝講あり 夕飯後村上甚平親父死去に付弔弔
罷越申候 帰りに林九兵衛に寄申候 豊後之僧義謙ニ近付ニ

成申候（元禄三年庚午日録）

（注ニ） 三浦為安、井伊侯に仕え、致仕して京に住む（先）。

（注ホ） 北村篤所、既出（注イ）。

（注ヘ） 平井徳建、字春益、本姓安福氏、名瑞雲、正徳五

年歿、七十四才（先）。

（注ト） 小河立所、名成章、称茂七郎、元禄九年歿、四十

八才（先）。

（注チ） 伊藤梅宇、名長英、通称重蔵、号梅宇、延享二年

歿、六十三才、仁斎の次男。

（注リ） 中江岷山、名一貫、通称快安、字平八、号岷山、

享保十一年歿、七十二才（先）。

（注ヌ） 渡辺元安か。既出（注ハ）。

（注ル） 北村篤所、既出（注イ）。

（注ヲ） 既出（注ヘ）。

文中に見える「竹笠屋」は、寺町の書物屋のようだが、この頃、東涯達は、義端の店と「竹笠屋」、それに「大和屋十左衛門」などに、しばしば本を見にでかけている。元禄四年以降、東涯の義端訪問の記事が少なくなるが、これは依拠した資料である東涯の『家乗』と『元禄九年日録』が、元禄二、三年の日録ほど詳細には書かれていないからで、実際には、元禄四年以降も、この程度の交流が続いたと考えるべきであろう。

元禄四辛未年

○正月、白菴編『唐僧詩選』を出版する。

元禄四年辛未正月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛壽

梓〈国古〉

○五月、東涯より「文會堂記」を与えられる。

「文會堂記」は、『紹述先生文集』に載録されるが、「今林九成文會を以て其楣に扁するなり」とあるほか、市井の賤業につく義端の志などが記されている。

○五月、三好周庵等と鴨河小楼に遊び、東涯、一色東溪等の詩を加え、詩集を編む。

鴨河小楼集序／（略）其詩、限りて三十六人を以て輯録し、一卷を為す。蓋し歌體に擬ふなり（略）／元禄辛未夏

五月端午日／林義端九成序（文翰雜編 附録）

義端等数人は鴨河で遊び、その際作った詩を回覧して、順次詩を加え、三十六歌仙になぞらえた三十六人の詩人の詩集「鴨河小楼詩集」を編集している。東涯は、「嗣林九成遊鴨河小楼韻」と題する詩を寄せ、義端も七言絶句を作っている。この詩集は、山本通春編『文翰雜編』の附録に載るが、版行された形跡はないようである。

○八月、仁斎点『魯斎先生心法』を出版する。

元禄四年辛未八月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛壽

梓〈古〉

本書の仁斎の序「刻魯斎心法叙」は、義端編『扶桑名賢文集』に再録される。

○秋、名古屋玄医編『怪病一得』を出版する。

元禄辛未之秋林九兵衛刊〈鶴富国〉

本書は、夏子益『奇疾方』と朱丹溪『怪病單』等を抄録した医書で、伊藤素安が序文を書いている。

○十一月、了意の遺作『狗張子』の序文を書く。

此書は了意大徳晚年思ひを究め精を研ぎて筆作せる真跡にして、是實に大徳遺訓の形見なるをや。是故に今その真蹟一字もあらためず、梓にちりバめ世に行ふ。(略)／元禄

四年辛未十一月日義端謹序

義端がどうやって了意の自筆原稿を入手したかについては、

了意の『新語園』の序文を書いている村田通信の蔵且詩が、古義堂文庫蔵の『元禄壬申試毫集』に載り、また彼の詩文集である『匏菴雜錄』が義端によって刊行されているので、この村田通信が、なんらかの形で関係した可能性があるかもしれない。

元禄五壬申年

○正月、了意著『狗張子』を出版する。

元禄五年壬申正月吉日／京東洞院夷川上町／林九兵衛／同堀河通高辻上町／伏見屋藤右衛門／同梓〈早〉

○二月、東涯、文會堂を訪れ、七言律詩「春仲文會堂席上作」を作る。(紹述先生文集 卷24)

○四月二十一日、「森本甚兵衛」を、古義堂に紹介する。

一、森本甚兵衛／伊勢四日市之人但林九兵衛同道被出候
(初見帳)

○九月、野子菰(野間三竹)編『北溪含毫』を求板し、出版す

る。

元禄五年壬申九月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛壽

梓〈狩加国内〉

本書は、「寛文龍集丙午季秋下辭／雜阻東六條伊藤氏刊行」と刊記に記される寛文版の求板本である。

○十月、『剪燈餘話』を出版する。

元禄五年壬申十月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛壽

梓〈狩鈴〉

元禄六癸酉年

○五月十日、「坂尻八郎兵衛」を古義堂に紹介する。

一、坂尻八郎兵衛 林九兵衛／加賀之町人(納礼志)

○八月、野間三竹子菰著『修養編』を求板、出版する。

元禄六年癸酉八月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛壽

梓〈富〉

本書は、「寛文壬寅孟冬中辭東武精舎教授向陽林之道甫」の序文があるので、求板本だと思われるが、初版本は未見である。

○秋、「悼山本通春子」歌詩」に詩を寄せる。

義端 林九兵衛

癸期相接未多時 一別絶望長独悲

曩日雄才真可惜 遺編空説鴨河詩(文翰雜編 卷20)

この追悼詩集は、谷蓬山の序や、「元禄六年歲次癸酉秋重陽前日」の吉田渙東菰の跋文に書かれるように、山本通春は実際に死んだわけではなく、通春自らが編集した詩集である。『文

翰雜編』の元禄十年の冊子（巻20）に収録されているので、元禄六年に一応の成立を見たあと、何編かの詩を追加して、元禄十年に完成したのであるう。ちなみに、山本通春喜内は、東涯の『家乗』によれば、元禄十五年七月十八日に死去している。

○十二月、陳復昌編・松下見林補『神国童蒙先習』を出版する。

元禄六年癸酉十二月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛
壽梓〈符〉

松下見林の「神国童蒙先習序」は、義端編『扶桑名賢文集』に収録される。

○この年、『玉櫛笥』前半三巻を著す。

去る癸酉の年予いやしくもその芳躰を継て。年ごろ見及び聞伝へし。近世奇怪の物語をあつめ玉櫛笥と題し。やうやく半かき三巻を著し函の底におさむ（玉櫛笥 序文）

元禄七甲戌年

○正月、雪村友梅著『岷峨集』を出版する。

元禄七年甲戌正月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛壽
梓〈国内早〉

○五月、村田通信著『匏菴雜錄』を出版する。

元禄七年甲戌五月之吉／京東洞院通夷川上町 林九兵衛壽
梓〈慶〉

○八月、『世説新語補』を出版する。

元禄七年甲戌八月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛梓
行〈符早〉

○この年、『石堂先生字義』を出版する。（和刻本漢籍分類目録）

による）

○この年より、『扶桑名賢文集』の編集を始める。

一、效編元禄甲戌より始めて、今茲戊寅に成る（略）（扶桑名賢文集 凡例）

元禄八乙亥年

○正月、『元禄歳旦詩集』（内題「三元彩毫」）を編集し、刊行する。

元禄八年／正月之吉／林九兵衛梓〈国〉

本書については、既に日野竜夫氏が「入江若水伝資料」で言及され、『日本古典文学大辞典』の「歳旦詩集」の項で、中野三敏氏も解説されているが、この元禄八年版と、天理図書館蔵『難波詩林』に筆録される宝永二年版、また義端の死後に林九兵衛店から刊行されている正徳四年版、延享二年版、宝暦十三年版の計五種が、現在知られているようだ。元禄八年版の「文會堂主人」の序文には、「等威之尊卑」や「進學之早晚」にこだわらずにこの歳旦詩集を編集したこと、「梓すべきか否か」を作者に逐一問う事をしなかったことが断われている。また「予今春粗之を集めんことを試み、將に明年より毎春悉く録し、梓行せんとす。若し夫人集を欲する者は、預かじめ投下せんことを乞ふ」とあるので、義端は、元禄八年以降、毎春『三元彩毫』の刊行を意図していたことになる。実際、後述するように、元禄十二年の東涯宛仁斎の書簡には、林九兵衛に命じて、鳥居播磨守に歳旦詩集を届けるように記されているし、元禄十一年に刊行された『扶桑名賢文集』の凡例にも「毎春親し

めにもせよとすゝむるに。例の技癢にたえずしてまた／＼玉簾子六巻をいだしぬ。(略)／元禄九年冬十二月朔旦／義端謹序(玉簾子 序)

元禄十丁丑年

○正月、一色東溪点校『泉志』を出版する。

元禄十年丁丑正月之吉／京東洞院通夷川上町 林九兵衛梓

〈宮国狩〉

○六月朔日から七月二日の間に、書肆「森田庄太郎」を、古義堂に紹介する。

一、森田庄太郎／大坂之書肆也 林九兵衛同伴なり(納礼志)

林森田太郎は、書肆のなかの学者として、『元禄大平記』に「儒学は五井加助門弟毛利田庄太郎」と記載されている。

○十月二十一日、「倉田権之丞」、義端の仲介にて、古義堂に入門する。

一、倉田権之丞／自被出候 下京ニ居申候親父勘右衛門と一処ニ前角壺井氏ニ逢申候 此度林九兵衛など噂にて被出候(納礼志)

○十一月五日、仁斎・東涯等、義端に招かれる。東涯、詩(七絶)を作る。

次ニ九成額 十一月五日林九成の招、若水・寅所・親長・特甫・良弼・時亮・岡玄昌、先生に従ひて到る(略)(紹述先生文集 巻27)

義端の編集した『扶桑名賢詩集』に、「会ニ林九成宅ニ次ニ主人

額 九成宅号「文金堂」と題する仁斎の詩が収録されるが、この時、作られたものかもしれない。東涯はしばしば義端を訪れていられるけれども、仁斎訪問の記事は、管見ではこれのみのようである。

元禄十一戊寅年

○五月、『扶桑名賢文集』の編集を終え、序文、凡例を附して刊行する。また、凡例で『扶桑名賢詩集』の梓行を予告する。

元禄戊寅仲夏日／文會堂林九成梓 〔国加早内〕

且つ屢、当時諸君子の枉顧を辱す。故に、又毎春、親しく諸大家の元旦の佳什を觀ることを得、遂に、自から搦らず、即刻撰次して、世に梓行す。第恨むらくは、半椽片瓦未だ以て大匠の用心を窺ふに足らざるを。是に於いて、広く近世群英の佳詠を採り、亦茲編に擬へ、題を扶桑名賢詩集と號す。梓行に志有れども、未だ及ぶに暇あらず。姑、他日を俟つのみ。(扶桑名賢文集 凡例)

前述したように、ここでは、『扶桑名賢詩集』の刊行を予告すると同時に、毎春、歳旦詩集(『三元彩毫』)を出版していた事が述べられている。

○九月、貝原損軒著『花譜』を出版する。

元禄十一年戊寅九月日／東洞院通夷川上町 林九兵衛／

高辻通雁金屋町 永原屋孫兵衛／同梓行

元禄十二己卯年

○正月、『医学至要抄』を出版する。

元禄十二年己卯正月之吉／京東洞院通夷川上町／林九兵衛

〈狩早内喜〉

○三月十一日、仁斎より東涯宛に、林九兵衛に命じて、鳥居播磨守忠教まで「歳旦詩集」を届けるよう依頼状が届く。また十三日には、催促状が届く。

一、太守江蔵旦詩集之事語申候得は御覽被成度之旨ニ御座候間京都へ申遣し懸御目可申旨致約束候 林九兵衛へ被仰遣追付御下し可被成候（三月十一日付東涯宛書簡）

一、先書に歳旦詩集之事申遣候 相達申候哉 播磨守様御所望ニより申遣候早々林九兵衛へ被仰遣急便ニ御下可被成候（三月十三日付東涯宛書簡）

○六月、岡本一抱子著『薬性記辨解』を出版する。

元禄十二年己卯六月之吉／京東洞院通夷川上ル町／林九兵衛／鳥丸通六角下ル町／西村市郎右衛門／梓行 〈国〉

○九月、仏光寺廟の父母・祖父母の墓石を改める。

元禄己卯十二年九月朔不肖孫林九兵衛改葬（墓石側面）

○十月、一色時棟編『二酉洞』を校定、上梓する。

元禄十二己卯歳十月日／林九兵衛／武村新兵衛／梓 へ加内早

本書の内題下に「一色時棟父編録／書坊林九成校梓」とある。

元禄十三庚辰年

○正月、一色時棟編『吟譜』を出版する。

元禄十三庚辰年正月日／京師／林九兵衛／林久次郎／梓行

〈国〉

○十月十三日、東涯、義端を訪れ、詩（七絶）を作る。翌日も夜、訪問する。

嗣南園迎客韻 十月十三日 林九成宅（紹述先生文集 卷28）

十月十四日 林九成宅へ夜話ニ行ク（伊藤氏家乗）

元禄十四辛巳年

○十月、『文林良材』に序と凡例を附し、出版する。義端の著作か。

元禄十四年辛巳孟秋吉旦／京城東洞院通夷川上町／林九兵衛梓行 〈内早〉

刊記には孟秋（七月）と記されるが、序文に「元禄辛巳孟冬朔旦／林義端九成拜撰」とあるので、実際には、孟冬（十月）に刊行されたのであろう。本書の著者については、凡例に「此ノ編ハ本ト是レ名儒某シ公ノ草藁ナリ（略）予是ヨリ先ニ懇ニ諸テ箇ニ蔵ム」と書かれている。文字どおりとれば、著者は未詳とすべきだが、『文法授幼鈔』の場合と同様に、義端の著作である可能性が高い。『諸家人物誌』『照朝儒林姓名録』『典籍作者便覧』『近代著述目録』などでも、義端の著述とされる。

○十月二十五日、東涯等と「山本宗林」の旅宿を訪問する。

因州人山本宗林旅宿（行 山本深円林九兵衛同来る（伊藤氏家乗）

元禄十五壬午年

○三月刊、都の錦著『元禄大平記』に、「伊藤素安の高弟林九兵衛」と記される。

○十月十八日、娘「如幻」、当歳で卒す。

元禄十六癸未年

○『通俗唐玄宗軍談』の校定を始める。

余検閲校定すること、去歳より今冬に至りて、方に其功を終ふ(略)。(通俗唐玄宗軍談 跋文)

注(1)

貞享四年刊前編と宝永三年刊後編の村田通信序文には、通信が書林の蔵していた原稿の出版をすすめ(前編)、校正をした(後編)事が記されている。後編の跋文では、「鶴水・胡・子翁著三詩林良材・已行于世也久矣」とあり、「植村玉枝軒」の蔵板目録にも、著者は、「水胡子翁」と記されている。また、文化八年刊、改刻版の岡崎元軌の序文には、「詩林良材村田翁所著」と、著者は村田通信である事が明記されているが、岡崎元軌が何を根拠にしているのか不明である。いずれにしろ、「水胡子」が村田通信である可能性こそあれ、『詩林良材』は、林義端の著作でない事は明白である。

(2)

伊藤固菴は、名は立誠、初め寸庵と号し、のち固菴と改む。正徳元年一月十四日歿す。年七十一。

(3)

原文は漢文だが、引用は書き下し文に改めた。

(4)

『考證學論攷—江戸の古書と蔵書家の調査—』所収

(5)

書肆・林義端考(『国文学研究』21集)

(6) 伊藤風竹軒素安については、古義堂文庫蔵の元禄五年と八年の歳旦詩集に、歳旦詩が、各一編入集し、また林九兵衛店より刊行された名古屋玄匠著『怪軼一得』の序文を彼が記しているの、義端と面識があったと推測される。伊藤固菴についても、貞享二年刊『京羽二重』によれば、義

端と同じ「東洞院夷川上ル町」に住んでいるから、やはり義端と交友があった可能性がある。

(7)

毛利元次文化園考(『江戸時代文学誌』2号)

(8)

碑銘は『京都名家墳墓録』、中村隆嗣氏・「玉櫛笥」考(『愛媛国文研究』27号)に、既に紹介されている。

(9)

以下、古義堂文庫蔵『初見帳』『納札志』の引用は、植谷元氏・伊藤仁斎の門人帳(上中下)(『ビブリア』69 70 71号)による。

(10)

(11) 蘆文水の跋文には「唐僧詩選は白也禪師の選する所なり。禪師、諱は如水、白菴と号す」(漢文)とある。

(12)

「前」と「後」が重なっており、どちらを修正したのか判別しがたい。したがって、「豊前」とも読める。

(13)

この絶句は「和鳴河即興」と題して、『文翰雜編』巻十四にも収載される。

(14)

宮内庁書陵部蔵。徳山藩旧蔵。現在、京都大学国文研究室より、翻刻が刊行中である。

(15)

元禄六年の吉田東莞の跋文に、「頃、書を寄せて曰く、悼詩已に成る。子、前約有り。請ふ跋せよ(略)」とあるので、元禄六年には、本書は一応成立していたと考えられる。

(16)

『近世大阪芸文叢談』所収

(17)

本書の跋文に「伊藤君玄恕へ。玄醫先生の高弟にして親炙の勲年久し」とある。

(18)

同書簡とも加藤仁平氏『伊藤仁斎の学問と教育』所載の翻刻より引用する。